

第4章

ロジック・モデルから 見えてきたもの

この章では、ジョブカレの利用者のAさんとBさん2人のロジック・モデル（個別版）を元に、それぞれの課題や支援の見通しについてジョブカレの支援者と検討した内容をまとめています。また、2人のロジック・モデル（個別版）の比較から、支援プログラムについても考察します。

第1節 2人のロジック・モデル（個別版）の考察

アンケート（p.40）を元に自己評価と他者（支援者）評価の結果を反映させたロジック・モデル（個別版）を用いて、ジョブカレの支援者と勉強会の形で課題や支援の見通しを検証しました。

ここで検討対象とした利用者は、AさんとBさんの2名です。Aさんは、ジョブカレ利用期間内に一般就労され、事業の目標である「地域で自立した生活を送ることができる」に近づいていった方です。Bさんは、支援プログラムへの参加が不安定な方です。両者の利用期間は、それほど大きな差がある訳ではありません。同じような期間の中で支援プログラムが提供されてきたと言えます。

次項からは、AさんとBさんのロジック・モデル（個別版）から見えてきた自己評価と他者（支援者）評価の共通点や差異、またそれぞれの課題や見通しについて、ロジック・モデル（個別版）の8分類（p.23参照）に基づき1つずつ確認していきます。なお、第4章における凡例は以下のとおりです。

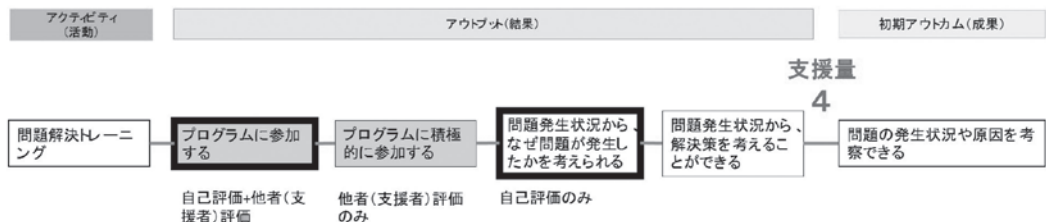
【凡例】

①ロジック・モデル（個別版）におけるアウトプット、アウトカム（結果）の項目について自己評価で評価されているものは太枠、他者（支援者）評価で評価されているものは背景網掛けとしています。

支援プログラムに対するアンケート例（利用者、支援者）

質問3：「問題解決トレーニング」のプログラムについて教えてください。	
利用者	質問3-1：「問題発生状況の考察」 ①プログラムに参加することができている → ②プログラムに積極的に参加している → ③問題発生状況を聞き、なぜ問題が発生したかを考えられる → ④問題発生状況を聞き、解決策を考えることができる
支援者	質問3：「問題解決トレーニング」のプログラムについて教えてください。 質問3-1：「問題発生状況の考察」 ①プログラムに参加することができている → ②プログラムに積極的に参加している → ③問題発生状況を聞き、なぜ問題が発生したかを考えられる → ④問題発生状況を聞き、解決策を考えることができる

ロジック・モデル（個別版）



②括弧内の符号（＜、＞、＝）は、自己評価と他者（支援者）評価の高低差を表しています。

③支援量の評価1～5は、ジョブカレがスキル評価シート（p.9-10）で用いているものです。（1：ほとんど毎回ひとりで行える、2：ひとりで行える時の方が多い、3：ひとりで行える時と支援を要する時が半々くらいである、4：支援を要する時の方が多い、5：ほとんど毎回支援を要する）

第1項 Aさん（ジョブカレ利用期間内に一般就労された方）

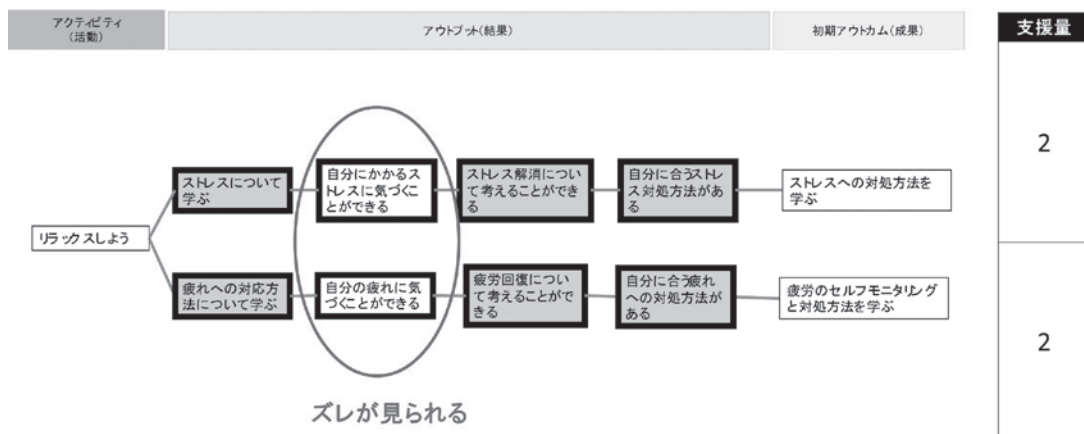
氏 名：Aさん 男性 30歳
 診断 名：アスペルガー症候群
 利用期間：1年4ヶ月

①認知能力の向上、自己効力感の回復（自己評価＞他者（支援者）評価）

この分類には、8つのアクティビティ（活動）が該当しますが、その内3つは未実施でした。しかし、この未実施のアクティビティについてもそれぞれ目標は設定されており、その目標に対してスキル評価シートでは評価（支援量4）がなされていました。未実施であるにも関わらず支援の必要性が高いと評価している点に対して、事業所としてどう対応していくか課題としてあがりました。

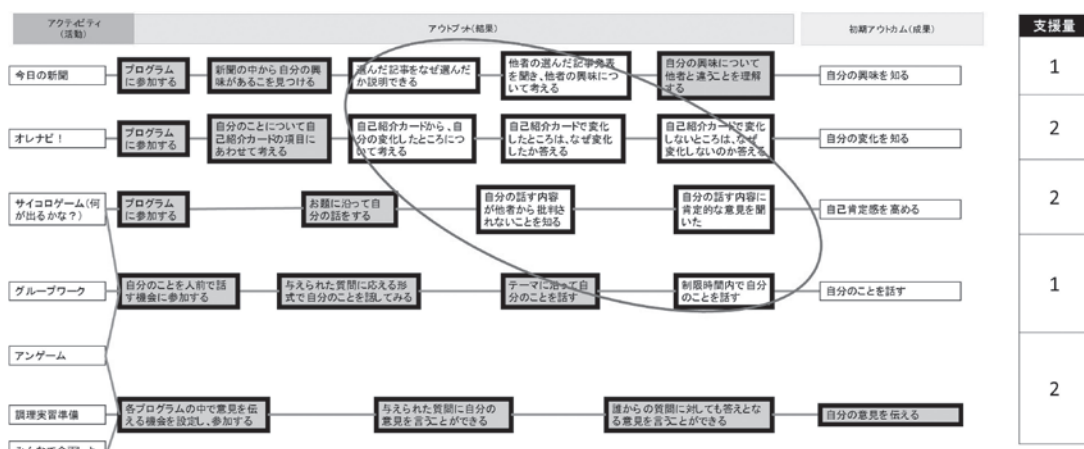
また、「リラックスしよう」というストレスや疲れへの対処方法を学ぶアクティビティのアウトプット（結果）では、「自分にかかるストレスに気づく」、「自分の疲れに気づくことができる」と

いう項目で、自己評価と他者（支援者）評価間にズレが見られました。自己評価では出来るとされているのに対し、他者（支援者）評価ではまだそこはクリアされていないという結果になりました。



②自己理解をすすめる（自己評価>他者（支援者）評価）

自己評価では、参加したアクティビティのアウトプットが全てクリアされていました。ここに、他者（支援者）評価とのズレが見られます。他者（支援者）評価に対し、自己評価がかなり高い状態であると言えます。この結果を受けて、ジョブカレの支援者からは「これをわかっていなかったからあの時、ああだったのか」といった声があがりました。本人が課題を自覚できていなかった状態がロジック・モデルを通して顕在化したと言えます。

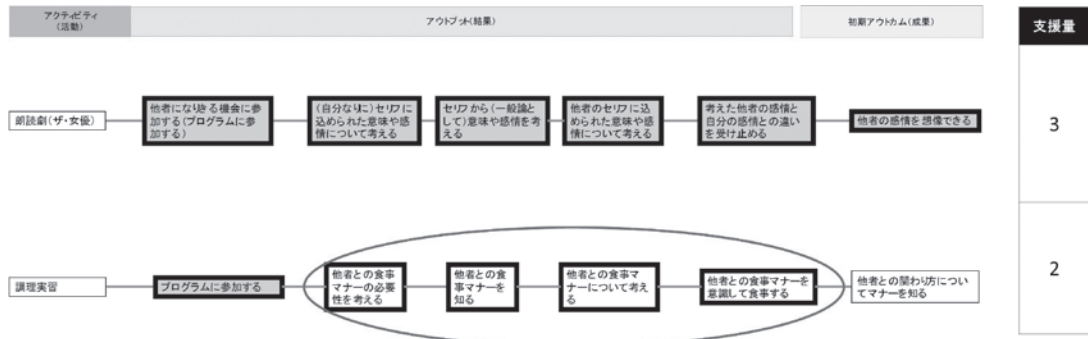


③他者理解をすすめる（自己評価>他者（支援者）評価）

この分類に関しては、全般にわたって出来ていると自己評価されています。アクティビティ「朗読劇（ザ・女優）」における初期アウトカム「他者の感情を想像できる」においては、利用者・支援者ともに全てクリアしていますが、支援の必要性は高いとされています（支援量3）。このことから、アクティビティそのものや、アウトプットの評価の道筋が妥当なのかを検討する必要がある

と言えます。

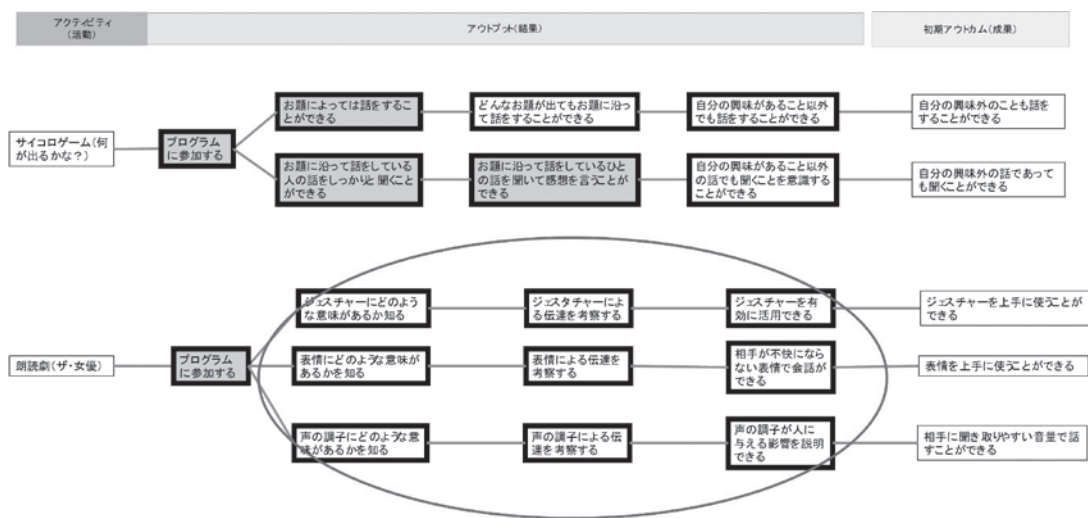
また、アクティビティ「調理実習」では、食事マナーへの考え方に大きなズレがみられました。さらに、他者（支援者）評価で出来ていないとされる項目が多い一方で、支援はあまりされていないことがわかります（支援量2）。本人と支援者の間の認識のズレを、今後すり合わせていく必要があることを示しています。



④コミュニケーションスキルを身につける（自己評価＞他者（支援者）評価）

アクティビティ「朗読劇（ザ・女優）」における、アウトカム「表情を上手に使うことができる」、「相手に聞き取りやすい言葉で話することができる」において、自己評価と他者（支援者）評価の間に大きなズレがみられました。

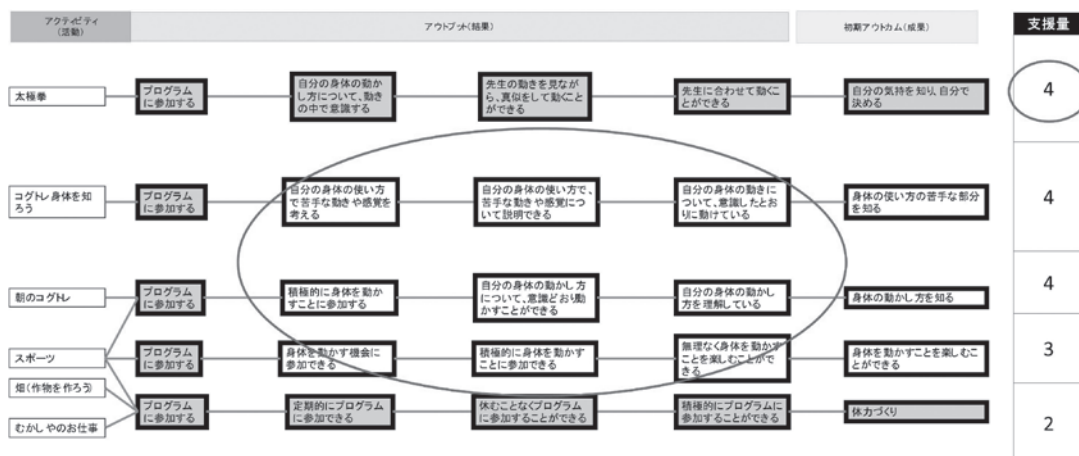
また、アクティビティ「サイコロゲーム（何がでるか?）」においても、本人は「自分の興味外のことを話す（聞く）」ことが出来るとする一方、支援者はまだそこに課題があると評価していることがわかります。



⑤身体理解をすすめる（自己評価>他者（支援者）評価）

この分類に関しては、8分類の中で最も自己評価と他者（支援者）評価にズレがある結果になりました。本人は身体の使い方や動かし方について理解できていると評価していますが、支援者からは低評価となっており、身体理解への考え方に課題が見られます。特に、「積極的に身体を動かすことに参加できる」より上位の項目に対して、支援者は評価をしていません。このことから、支援者がAさんの「積極性」に課題を感じているということがわかります。一方で、勉強会のなかでは「積極的って何だろう」という声もあがりました。アウトプットにこうした抽象的な表現が含まれていたことも、ズレが生れた一因かもしれません。

また、アクティビティ「太極拳」では、自己評価・支援者評価ともに初期アウトカムまで達成になっていますが、依然として支援量は4と多く設定されていることから、アクティビティやアウトプットの道筋を検討する必要があります。



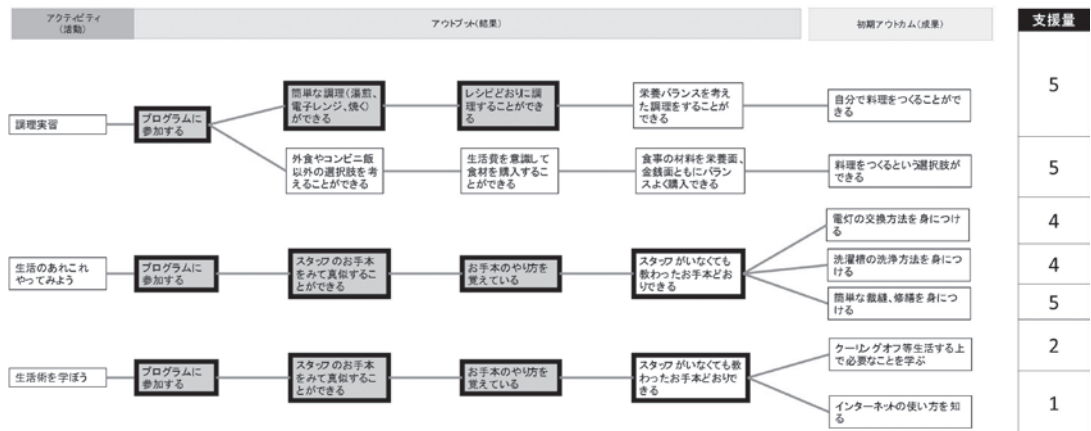
⑥働くスキルを身につける（自己評価≒他者（支援者）評価）

ここまでAさんには、自己評価が他者（支援者）評価より高い傾向が顕著にみられましたが、この分類においては概ね支援者の評価も高く、大きなズレはみられませんでした。ほぼ全ての項目をクリアしているという結果になりました。

⑦生活スキルを身につける（自己評価＞他者（支援者）評価）

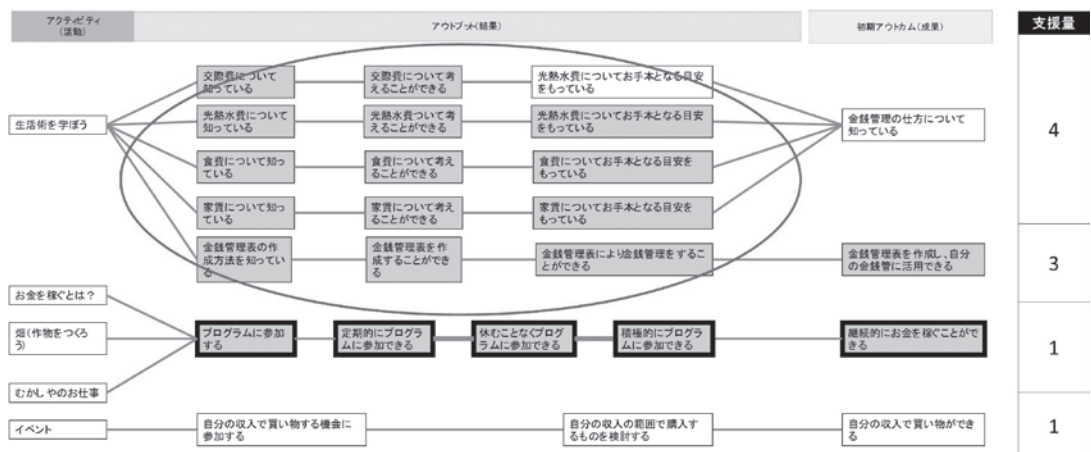
アクティビティ「調理実習」における自炊についての評価に両者のズレはありませんでした。ただし、支援量は最高値である5となっており、アクティビティの支援内容を考えていく必要性があることがわかります。

日常生活スキルについては、本人が評価している項目であっても支援量が多いと判断されている項目があります。お互いのズレをすり合わせる必要があると言えます。



⑧金銭管理ができるようになる（自己評価＜他者（支援者）評価）

全分類のうち唯一、自己評価が他者（支援者）評価より低い結果になりました。この結果から、お金について本人が不安を覚えていることがわかります。金銭管理の仕方については、支援者がアウトプットを概ね評価する一方で、本人は学んでいないと評価しており、ここに大きな認識の違いがあることがわかりました。



第2項 Bさん（支援プログラムに参加しにくい方）

氏 名：Bさん 男性 23歳
 診 断 名：注意欠陥障害
 利用期間：1年6ヶ月

①認知能力の向上、自己効力感の回復（自己評価＞他者（支援者）評価）

アクティビティへの参加は少ないですが、「プログラムの問に対して解答を聞いて理解する」、「調理手順書を見て手順を理解する」という項目を自己評価しています。このことから、アクティビティへの参加の有無に関わらず、達成しているという認識があると推察できます。

アクティビティ (活動)	アウトプット(結果)				初期アウトカム(成果)	支援量
今日の新聞	プログラムに参加する	新聞を読むことができる	選んだ新聞記事について要約する	要約された記事を発表する形式にまとめる	認知機能(記憶、言語理解、注意、知覚、推論、判断、要約、模倣、危険、察知)がのびる	4
あたまの体操	プログラムに参加する	認知能力とは何かについて知る	認知能力を伸ばす必要があると感じる	積極的にプログラムへ参加する		
問題解決トレーニング	プログラムに参加する	プログラムに積極的に参加できる	問題発生状況から、なぜ問題が発生したかを考えられる	問題発生状況から、解決策を考案することができる	問題の発生状況や原因を考察できる	4
脳の筋トレ	プログラムに参加する	プログラムの問に対して解答できる	プログラムの問に対しての解答を聞いて理解する	間違った解答について返張り理解する	問題解決方法を知る	4
感情コントロール (アンガーコントロール)	プログラムに参加する	怒りの仕組みについて知る	自分の怒りの感情に気づく	反発したくなるケースにおいて怒りをコントロールする	感情コントロール方法を知る アンガーコントロールを知る	4
リラックスしよう	ストレスについて学ぶ	自分にかかるストレスに気づくことができる	ストレス解消について考えることができる	自分に合うストレス対処方法がある	ストレスへの対処方法を学ぶ	4
	疲れへの対応方法について学ぶ	自分の疲れに気づくことができる	疲労回復について考えることができる	自分に合うストレス対処方法がある	疲労のセルフモニタリングと対処方法を学ぶ	4
調理実習	調理手順書を見て取り組み始める	調理手順書を見て、手順を理解できる	調理手順書でわからないところを、確認しながら取り組める	調理手順書どおり人々と取り組める	手順に沿って作業をする	3
各プログラム	30分間集中してと取り組む	1時間集中してと取り組む	1時間30分集中してと取り組む	2時間集中してと取り組む	集中して作業に取り組む	1

②自己理解をすすめる（自己評価＞他者（支援者）評価）

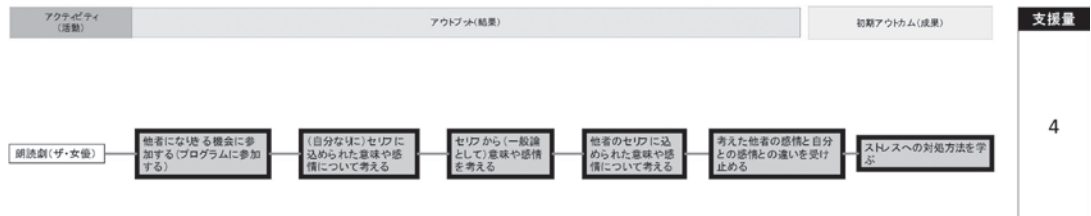
アクティビティへの参加が少ないこともあり、Bさんの自己評価、また他者（支援者）評価ともに低い結果となっています。「自分の役割・責任を果たす」というアウトカムを見てみると、支援量が4と多く設定されていることから、支援者が支援の必要性を感じていることがわかります。しかし、アクティビティへの参加そのものが少ないということから、自己理解に対してのアプローチがあまりできていないという状況です。

アクティビティ (活動)	アウトプット(結果)				初期アウトカム(成果)	支援量
リラックスしよう	ストレスについて学ぶ	自分にかかるストレスに気づくことができる	ストレス解消について考えることができる	自分に合うストレス対処方法がある	ストレスへの対処方法を学ぶ	4

③他者理解をすすめる（自己評価⇄他者（支援者）評価）

自己評価と他者（支援者）評価の間のズレは、比較的少ない結果となりました。

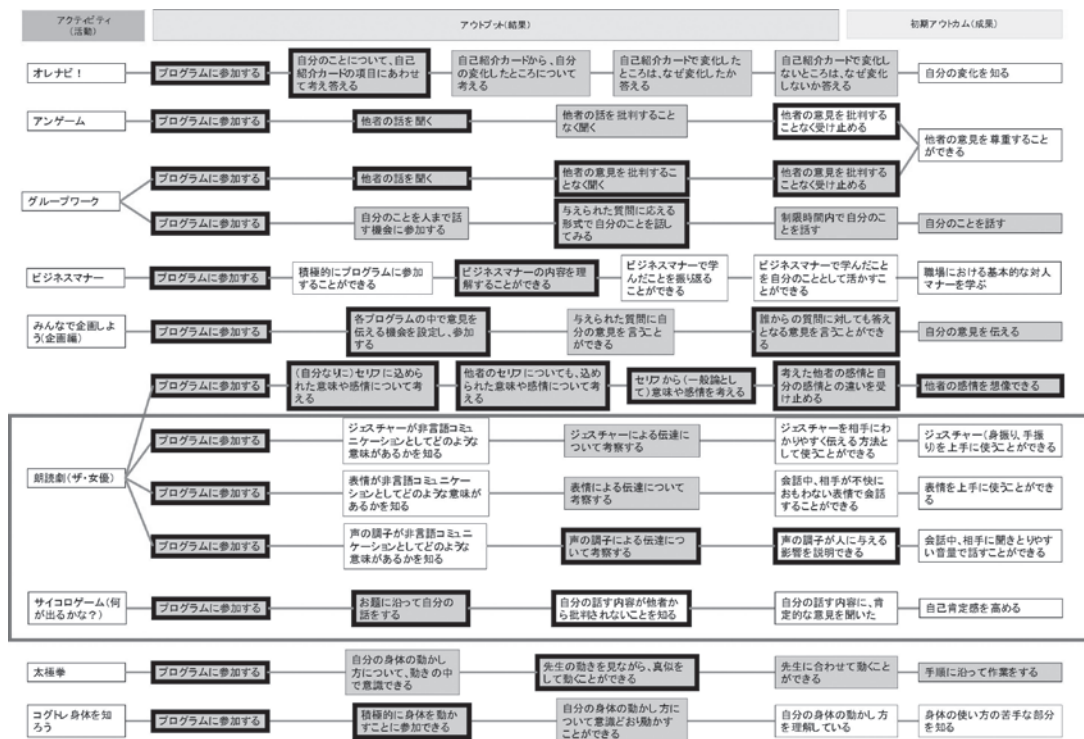
ここで特筆したいのは、アクティビティ「朗読劇（ザ・女優）」についてです。初期アウトカム「他者の感情を想像できる」において、Aさんと同様に利用者・支援者ともに全てクリアする結果になりました。しかし、Bさんにおいてもやはり支援の必要性は高い（支援量4）という結果になりました。このことから、「朗読劇（ザ・女優）」というアクティビティが、「他人の感情を想像できる」というアウトカムに対して、どこまで効果を成しているのかが問われてきます。アウトプットの評価の道筋が妥当なのか、検討する必要があると言えます。



④コミュニケーションスキルを身につける（自己評価⇄他者（支援者）評価）

この分類でも、自己評価と他者（支援者）評価に大きなズレはありませんでした。

Bさんのアクティビティへの参加の有無に関して、全アクティビティから総合的に判断した場合は確かに「参加しにくくなっている」状態と言えますが、ロジック・モデル(個別版)を分析する中で、アクティビティの種類によっては参加が安定しているものもあるということが浮かび上がってきました。下図は全34のアクティビティの内、Bさんが参加できている10のアクティビティを挙げたものです。④に関しては、「感情コントロール」「朝のコグトレ」「朗読劇（ザ・女優）」「サイコロゲーム（何がでるかな?）」の4つのアクティビティが該当しますが、そのうちの2つに参加できているという評価がされていました。この2つのアクティビティの特徴として、ゲームや体験形式のアクティビティであることがわかります。全分類を通してそのようなアクティビティには参加している傾向があると言えます。



⑤身体理解をすすめる(自己評価÷他者(支援者)評価)

スキル評価シート上では支援量は概ね低く設定され、支援者がこの分類に対してあまり支援の必要性を感じていないということがわかります。アクティビティの「太極拳」からは、支援者は評価しているものの、Bさんに苦手意識があるということがわかります。しかし一方で、自己評価・他者(支援者)評価ともにできていないと判断されている項目に対して、支援量が少ないものもあります。アクティビティやアウトプットの道筋、また支援量に関しても妥当性の検討が必要です。

アクティビティ (活動)	アウトプット(結果)				初期アウトカム(成果)	支援量
太極拳	プログラムに参加する	自分の身体の動かし方について、動きの中で意識できる	先生の動きを見ながら、真似をして動くことができる	先生に合わせて動くことができる	自分の気持ちを自分で決める	1
コグトレ 身体を知ろう	プログラムに参加する	自分の身体の使い方で苦手な動きや感覚を覚える	自分の身体の使い方で、苦手な動きや感覚について説明できる	自分の身体の動きについて、意識したお題に動いている	身体の使い方の苦手な部分を知る	1
朝のコグトレ	プログラムに参加する	積極的に身体を動かすことに参加できる	自分の身体の動かし方について意識でき、動かすことができる	自分の身体の動かし方を理解している	身体の動かし方を知る	1
スポーツ	プログラムに参加する	身体を動かす機会に参加できる	積極的に身体を動かすことに参加できる	無理なく身体を動かすことを楽しむことができる	身体を動かすことを楽しむことができる	3
畑(作物を作ろう)	プログラムに参加する	定期的にプログラムに参加できる	休むことなくプログラムに参加することができる	積極的にプログラムに参加することができる	体力づくり	3
むかしのお仕事	プログラムに参加する					

⑥働くスキルを身につける（自己評価≠他者（支援者）評価）

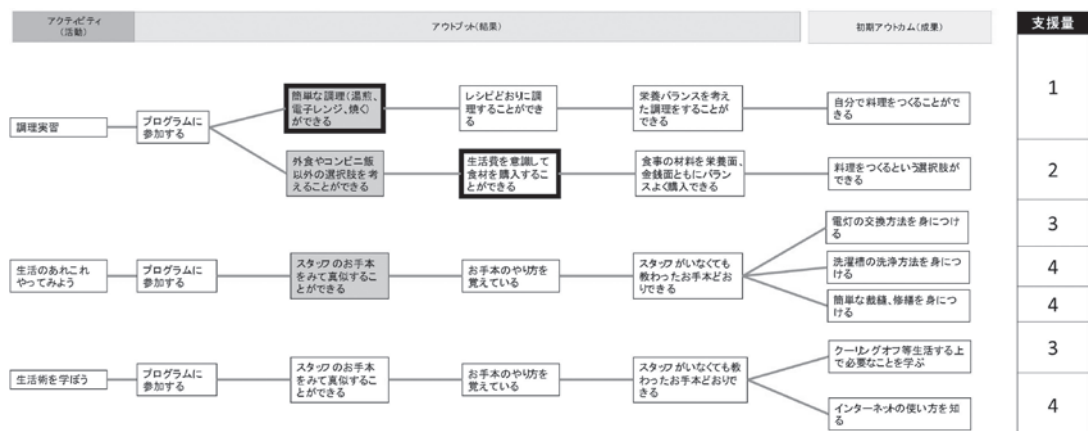
勉強会では、この分類についてのアセスメントがとりにくいとの声がありました。アクティビティへの参加が少ないため、本人も支援者も評価が難しいということです。

⑦生活スキルを身につける（自己評価≠他者（支援者）評価）

Bさんの自己評価としては、アクティビティへの参加はできていなくとも、「簡単な調理をする」、「生活費を意識して食材を購入する」まではできるという評価でした。

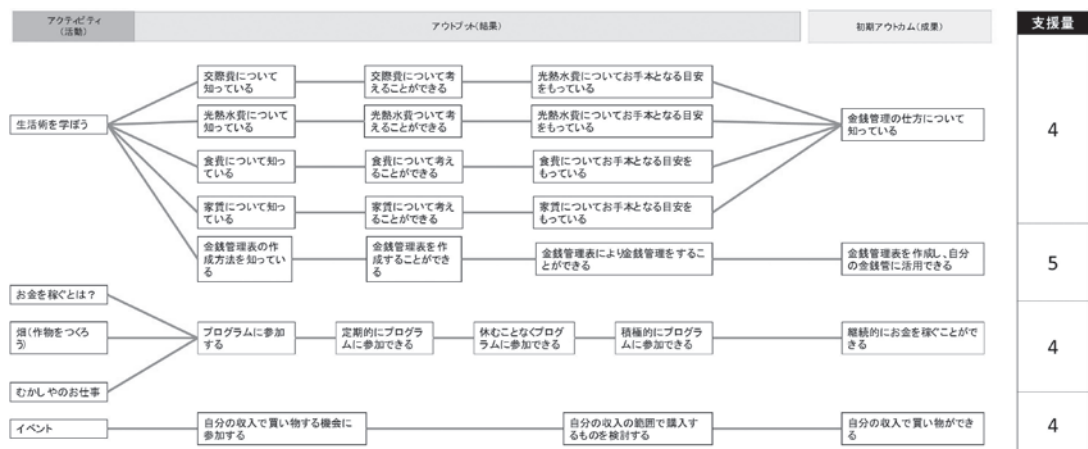
Bさんの生活スキルについて勉強会で話し合うなかで、支援者の間でも評価にズレがあるということがわかり、元々つけていた他者（支援者）評価がその場で変更されるということがありました。（以下に掲載しているロジック・モデルは変更後のものです）

生活スキルについては、本人・支援者ともに課題を感じているようです。



⑧金銭管理ができるようになる（自己評価≠他者（支援者）評価）

この分類に関しては、本人も支援者も一切評価をしないという結果になりました。また、支援量も全体的に多めに設定されています。このことから、お金についての課題を両者ともに強く感じていることがうかがえます。一方で、アクティビティを通じてのアプローチはできておらず、アクティビティのアレンジや新たな創出をしていく必要性があると言えます。



第3項 AさんとBさんのロジック・モデル（個別版）の比較・考察

前項では、AさんとBさんのロジック・モデル（個別版）を活用した自己評価と他者（支援者）評価についてそれぞれ検証をしました。AさんとBさんの課題やこれからの支援の見通しを踏まえ、本項では、その結果見えてきた2人の違いについて比較・考察したことをまとめています。AさんとBさんの違いは大きく分けて4点ありました。

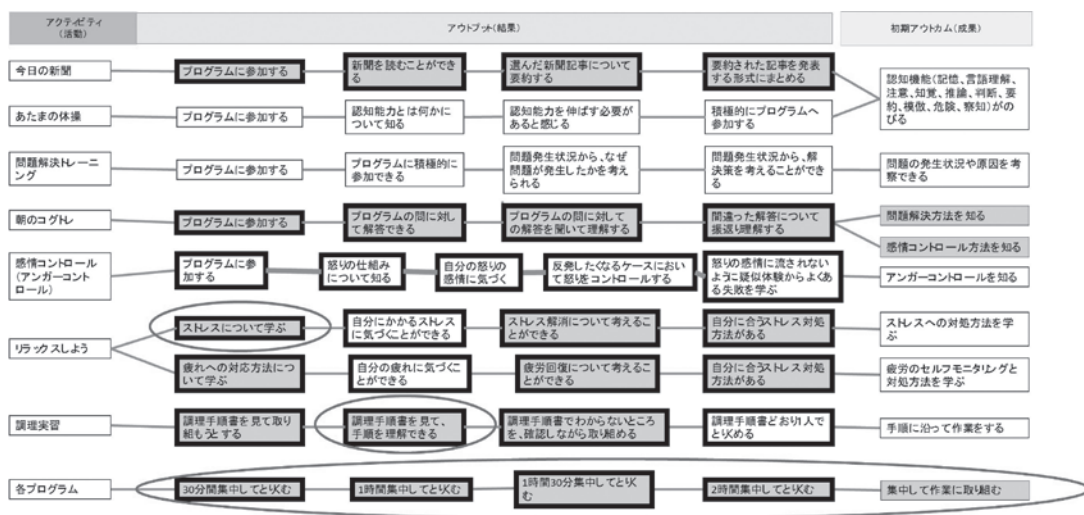
（Ⅰ）午前に実施されるプログラムへの参加の有無

支援プログラムは、午前と午後に区切られて実施されています。午前は、朝活動の実施後に、生活体験プログラムや就労準備プログラム等が実施されます（p.7-8プログラム内容を参照）。Aさんは、休むことなく午前のプログラムに参加できています。一方で、Bさんは午後のプログラムから参加となることがほとんどです。2人には、午前のプログラムに継続的に参加できているかどうかの違いがありました。Bさんには、生活リズムの整えや午前のプログラムへの参加の必要性を認識してもらうような関わりが必要になると考えられます。

（Ⅱ）「①認知能力の向上・自己効力感の回復」の進捗具合の差異

支援プログラムのロジック・モデルにおいて、8分類の中の「①認知能力の向上、自己効力感の回復」に該当しているアクティビティへの参加数に違いが見られました。

下図はAさんのロジック・モデル（個別版）をベースに、Bさんの他者（支援者）評価のみが丸囲みされているものです。



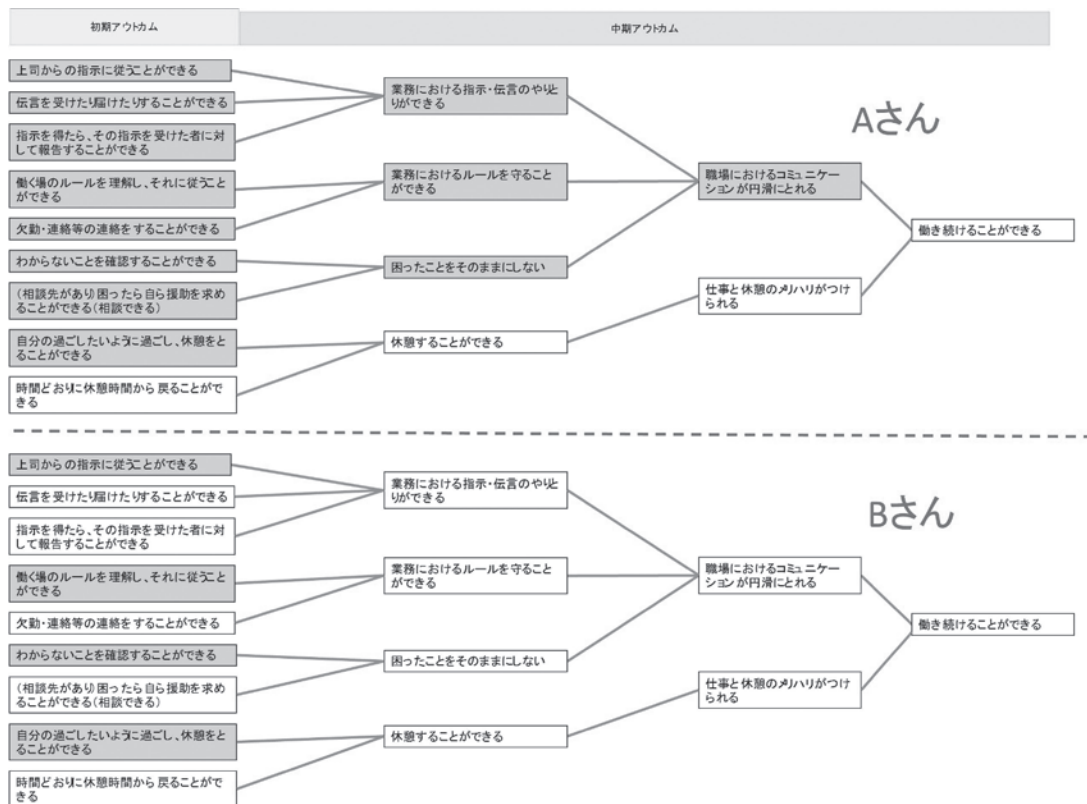
Aさんは、8つ中5つに参加しておりアウトプットも進捗しています。一方で、Bさんは8つ中3つへの参加と、アウトプットの進捗が良くない状態となっていました。前項の「④コミュニケーションスキルを身につける」でも確認しましたが、Bさんが参加できているプログラムを考察すると、ゲームや体験形式のアクティビティへの参加が多く、アウトプットの進捗も良好なことがわかります。Bさんが分類①の進捗具合を改善するためには、参加しやすくなるようなアクティビティを検討することが必要になると考えられます。

(Ⅲ) 自分の役割に対する意識の有無

8分類の中の「②自己理解をすすめる」において、初期アウトカム「自分の役割責任を果たす」へのアウトプットの進捗や支援量に大きな違いがありました。Aさんは初期アウトカムまで本人も支援者も、できるという評価をしています。一方でBさんは、本人も支援者も、できていないという評価になっており、支援量も4と高くつけられていました。この初期アウトカム「自分の役割責任を果たす」にはアクティビティとして、「みんなで企画しよう！（実践編）」と「調理実習」が該当しています。参加できているAさんには有効にプログラムが機能していることから、Bさんにとってこのアクティビティが機能していない点について深く考察していく必要があると考えられます。

(Ⅳ) 「⑥働くスキルを身につける」においての差異

「⑥働くスキルを身につける」において、中期アウトカムである「働き続けることができる」へのロジックの進捗に、下図のような差異がみられました。一般就労されたAさんをモデルとして、「Aさんが習得されたスキル＝就労をするために必要なスキル」ということでアクティビティへの参加や経験値を積み上げる必要性を話していくことができる可能性があります。



個人のアセスメントやプログラムの環境について、ロジック・モデル（個別版）を眺めることで、利用者・支援者ともに何ができているのか、何がお互いに足りていないのかを考察することができます。利用者と支援者ともに評価が一致しており、初期アウトカムへのロジックが機能していると判断できるものがある一方で、初期アウトカムまで達成していると評価しながらも支援量が高い項目があったり、利用者と支援者の評価のズレが大きい項目があったりしました。これらの支援プログラムについては、修正も含めた見直しが必要になってくると言えそうです。個人の障害特性上、設定したスモールステップのアウトプットでは機能していないのではないかと考えられる項目もありました（p.48「朗読劇（ザ・女優）」参照）。

ロジック・モデル（個別版）は、個人の特性と支援現場の環境も含めたアセスメントが可能であり、それを基に環境設定を話し合い、実施していくことに機能するものと考えられます。繰り返しますが、ロジック・モデルを決定することが正解ではありません。一定の枠があり見通しが持てる状態を基礎とし、個々に応じて柔軟にアレンジすることが重要です。

今回の勉強会ではAさんとBさんのロジック・モデル（個別版）を比較・考察することで、支援者同士が振り返る時間をつくることができました。支援者の経験年数に関係なく、項目の違いや利用者像から推測し、考察したことは非常に意味があるものではないでしょうか。

今回は2名をモデルとして考察しましたが、更に多くの対象者の方を比較・考察することで、より有効な支援プログラムの検証がすすめられると考えられます。

勉強会に参加したジョブカレ支援者の感想

- (1) 支援者が、「できている」と評価していたアクティビティからのアウトプットが、ロジック・モデルをとおして考察すると理解できていないことが分かった。このことを意識して支援を考えないと、お互いの認識のズレが修正されないまま、次のアクティビティを設定したり、課題の捉え違いが起こったり、原因を別に置き換える（障害特性に起因するetc.）ことが起こる気がする。
- (2) 支援量数値を高く評価した（より支援が必要だと判断した）項目があるが、そこへアプローチをするアクティビティが未実施となっていることが分かった。アクティビティの設定は、個別支援計画と連動して考える必要があると再認識した。
- (3) 自己評価と支援者評価のズレが見て分かった。「本人が理解できていると評価しているが、支援者ができていないと評価した項目（利用者が課題を自覚していない）」や「支援者が理解できていると評価し、利用者ができていないと評価した項目（支援者が課題に対してアプローチをしなくなる）」のズレがどの場所で起きているかが体系的に理解できた。ズレている項目に対してピンポイントですり合わせを意識して関わることができると思った。
- (4) 参加していないアクティビティであるにも関わらず、アウトプットの「●●を理解することができる」という項目には「できる」という自己評価がある。アクティビティを受けなくても「できる」という考えがあるのではないか。プログラムをなぜ受けるのか伝わっていないのかもしれないと思った。
- (5) 自分の感情や思考については、「理解している」という自己評価がある。一方で、自分の思っていることを相手に伝えられているか、という項目は「できていない」という自己評価をしている。支援者評価は、「自分の思っていることを相手に伝えることができる」と判断している。思っていることを話せていない、ということがあるのではないかと思った。

第2節 支援現場におけるロジック・モデル活用の可能性

前節では、ロジック・モデルを活用した自己評価と他者（支援者）評価の結果を比較することで、支援現場での課題やこれからの支援の見通しが見えてきました。また、比較したロジック・モデルの結果から、事業の目標に対しての各構成要素の因果関係についても考察することができました。

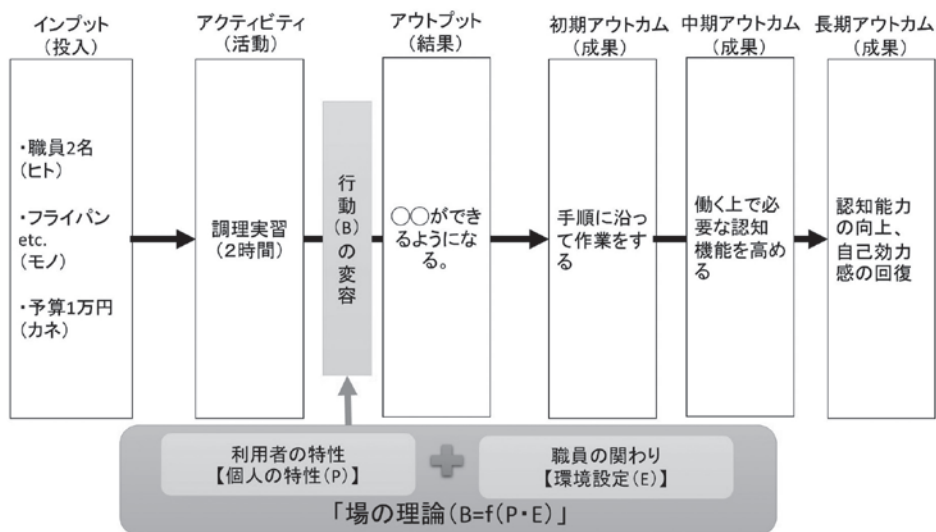
ここでは、支援現場におけるロジック・モデル活用の可能性について考察していきます。

ジョブカレの支援プログラムは、「地域で自立した生活を送ることができる」という目標にむけて取り組まれています。ロジック・モデルは、この目標を達成するための道筋や関係性を示しています。この目標を達成するためには、アウトカムを達成するためのアウトプットを積み重ねていく必要があり、支援現場で実施されるプログラムは、このアウトプットを積み重ねていくことになります。期待するアウトプットを得るためには、利用者の行動変容を意識し敏感に察知する必要があります。これは言うまでもありません。

行動変容と言っても、個人の特性にだけアプローチしていただくだけでは変容しません。社会学者のK.レヴィン（1951）は「人間の行動（B）は個人の特性（P）とその人を取り巻く環境（E）との関数（f）すなわち相互作用によるものである（ $B=f(P \cdot E)$ ）」という「場の理論」ⁱ⁾を提唱して、行動変容について言及しています。つまり、人の行動変容は個人の特性だけではなく、その人が置かれた「場」に影響を受けるということになります。個人の特性だけにアプローチするのではなく、環境の開発も行なうことで、期待される行動があらわれるということです。

図28は、支援プログラムの「調理実習」のロジック・モデルを抽出し、「場の理論」を重ねた図です。支援現場において、「場の理論」における個人の特性（P）はアセスメントによりどこまでその人のことを理解しているのかということになります。また、その人を取り巻く環境（E）とは、プログラムを実施する環境（物理的環境、人的環境etc.）を指します。

【図28：支援プログラム ロジック・モデル「調理実習」と「場の理論」】



i) K.レヴィン（1951）『社会科学における場の理論』